

白紙余談

震災やコロナの恐怖に悩む国民の横で展開される五輪組織委会長問題の違和感

◇ご承知のように、先週土曜（13日）に東北地方で発生した「東日本大震災の余震」に伴い、東北から関東にかけて最大約95万戸の大規模停電が発生した。表面上の数値で特徴的なのは、停電が発生した約95万戸のうち東京電力管内（関東地方）が約86万戸、東北電力管内（東北地方）が約9万戸だったことだ。ネットの反応をみると、このことに疑問を感じる人が少なかつたようだ。なぜ揺れの大きかつた東北より関東のほうが停電が大規模なのか、ということなのだろう。

◇これはもちろん、停電の戸数の大小は、震源地に近いかどうかの問題ではなく、単純に関東地方のほうが人口・住居戸数ともに、東北地方に比べ圧倒的に多いということにすぎない。逆に関東地方の近くに震源地があつたら、関東地方の停電戸数は数層倍になつた可能性が高い。いずれにせよ、東日本大震災の10周年当日（令和3年3月11日）のほぼ1か月前に、東日本大震災の震源地に近い場所（今回のほうが震源が深かつたため、津波はかえって起きにくかつたらしい）で、大きな地震が発生したということに、日本全体が大きな衝撃に包まれたらしいことは、マスコミ各社の報道からも推測できる。

◇大規模停電が発生しただけでなく、交通網にも大きな影響が表れた。東北新幹線・山形新幹線・秋田新幹線などが運転見合わせを行い、道路も何か所かで寸断した。折しも筆者は2月16日～17日まで、茨城県内のある都市に1泊2日の出張を予定していた。たまたま今回はその地に行く交通手段には影響はなかつたもの

の、東日本大震災直後に山陰地方へ取材に行こうとして、大規模な余震に見舞われ、新幹線がストップした苦い記憶がよみがえった。茨城県の出張先は東日本大震災の際、死者こそ出なかつたが、負傷者は50人以上も出た。さらに、家屋の全半壊被害は5千戸以上におよび、多くの市民が避難所生活を余儀なくされた。

◇それだけに、出張先で会う人みな、異口同音に「地震が起きたとたん、東日本をすぐに想い出し、胸がどきどきした」と話していたのが印象的だった。

◇それは今回の地震の揺れをまったく感じなかつた遠方に暮らす人々にとっても、同様だったようだ。東日本に暮らす人には東日本大震災の記憶が新しい。しかし、東日本以後、熊本、北海道で大きな地震災害があり、近い将来の巨大地震の到来が予測されている地方は、ほぼ全国にまたがっている。みな「明日は我が身かもしれない」という意識にかられたのだろう。

◇今回の地震では避難所に個別テントが運び込まれているというニュースが、茨城のビジネスホテルでみた報道番組で流れていた。それは東日本大震災の教訓や新型コロナウイルスをはじめとする感染症対策も含めた措置としてのことであるわけだが、新型コロナウイルスにおける「自然災害に伴う避難所暮らし」のシミュレーションが、東北地方では図らずもできたことになる。

◇そんな市民目線の現実の渦中にあると、五輪組織委員会会長の後任問題などとてもなく遠い話にみえてくる。「何をやっているのだろう、あの人たちは」というような、冷めた思いしか湧いてこないのだ。（E）